

農業技術情報

令和4年6月3日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

JA 十勝池田町 572-3131

池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の遅速(6月1日現在) ()内は平年値 斜体は前年度数値

作物名	遅速 日数	生育状況	農作業状況
秋まき小麦	+3	草丈 69.5 (58.0)cm 茎数 1,039(1,022)本/m ²	止葉期 5/23(5/27) 出穂始 5/31 (6/3)
馬鈴しょ(メークイン)	+3	茎長 6.0 (4.0)cm 茎数 2.5 (1.8)本	萌芽期 5/26(5/29)
馬鈴しょ(男爵)	-	茎長 5.6cm 茎数 2.4 本	萌芽期 5/23
大豆	+3		出芽始 5/24(5/27) 出芽期 5/27(5/30) は種始 5/10(5/13) は種期 5/14(5/16) は種終 5/16(5/18)
小豆	±0		出芽始 6/1(6/1) 出芽期 6/3(6/3) は種始 5/17(5/17) は種期 5/20(5/21) は種終 5/23(5/25)
菜豆(金時)	-		は種始 5/24(5/26) は種期 5/26(5/29)
菜豆(手亡)	-		は種始 5/19(5/22) は種期 5/22(5/25) は種終 5/27(5/31)
てん菜(移植)	+1	草丈 17.0(12.2)cm 葉数 10.2(10.4)枚	
てん菜(直播)	+2	草丈 9.1(7.5)cm 葉数 5.5 (5.4)枚	
牧草	±0	草丈 68.2(67.3)cm	
サイレージ用 とうもろこし	+3	草丈 15.0(8.6)cm 出葉数 3.4(2.8)枚	出芽期 5/22(5/25) は種期 5/13(5/14) は種終 5/20(5/23)
たまねぎ(直播)	-	草丈 17.0 (-) 生葉数 2.2 (-)	

畑 作

<秋まき小麦>

出穂は平年に比べ早いので、病虫害防除等のスケジュール遅れが出ないように計画的に実施してください。茎数は平年並ですが、倒伏の恐れのあるほ場もあります。ほ場をよく観察し施肥管理に注意してください。

(1) 赤かび病の防除

赤かび病は開花時期に最も感染しやすく、多湿条件で多発します。出穂揃からの予防的防除が重要です。1回目の適期はほとんどの穂が穂首まで出た開花始期（図1 参照）ですが、開花始に雨天の恐れがある場合は、出穂揃から防除します。ほ場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除（出穂揃）を実施した場合は、生育が遅い部分や、既に使用した薬剤の使用回数等を考慮し、2回目以降も適切な防除を実施してください。出穂後に雨天が続く場合は防除間隔を7日以内とすることも検討してください。



図1 赤かび病の1回目防除時期

表1 赤かび病防除体系例

防除時期	農薬名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (出穂期以降)
1回目 (開花始)	バラライカ水和剤	500	14日	2回以内
2回目 (1回目の7日後)	ベフトップジンフロアブル	800~1,000	14日	1回以内 (出穂期以降)
3回目 (2回目の7~10日 後)	シルバキュア フロアブル	2,000	7日	2回以内
4回目	チルト乳剤 25	1,000~ 2,000	3日	3回以内 (春期以降)

※チルト乳剤は、他作物に薬害が生じる可能性があるため飛散に注意しましょう。

表2 小麦の各薬剤の防除効果（令和4年度北海道病害虫・雑草防除ガイド）

薬剤名	種類	RACコード	希釈倍数	使用時期 (収穫前)	赤さび病	赤かび病	DON濃度低減	ニバーレ
チルト乳剤 25	F	3	1,000	3日前	○	●		
			2,000		●	●		
シルバキュアフロアブル	F	3	2,000	7日前	●	●	●	
リベロ水和剤	F	3	2,000	7日前	●	●	●	
トップジンM水和剤	F	1	1,500	14日前		●	●	
			1,000			○		
ベフラン液剤 25	F	M7	1,000~2,000	14日前		●		
			1,000				●	●
ベフトップジンフロアブル	F	1 M7	800~1,000	14日前		●	●	●
プライア水和剤	F	10	1,000	21日前		●	●	●
		1	1,500			●		●
バラライカ水和剤	F	3 M4	500	14日前		●	●	●

注)●:北海道指導参考 ○:登録あり

(2) アブラムシ類の防除

ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【要防除水準】

アブラムシ：出穂 10 日後頃に半分以上の穂でアブラムシが観察される場合のみ、1 回防除が必要。

表3 アブラムシ類防除例

害虫名	農薬名	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	回数(以内)
アブラムシ類	ウララ DF	4,000	7日	2回
	スミチオン乳剤	1,000	7日	1回
	アドマイヤー 顆粒水和剤	15,000	14日	2回
	ペイオフME液剤	2,000	7日	2回

<てんさい>

移植およびは種作業は終了しました。ほ場の透水性向上を図る中耕作業や雑草対策を励行しましょう。

(1) 中耕

ア 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、初期生育の促進に努めましょう。

イ 中耕の深さは根の広がりを確認し、生育初期には浅めに調整し、次第に狭く深くして畦間が茎葉で覆われる時期まで実施しましょう。

ウ 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

(2) 除草剤散布

ア 除草剤散布のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、生育と雑草の発生に応じた処理に注意してください。

イ 直播栽培は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。

ウ 直播栽培の初回散布時期は雑草発生始～発生揃（てんさい本葉2葉期）で、は種後30日前後が目安になります。てんさいの葉齢が進んでいない幼小個体では生育が抑制される場合があるため、注意が必要です。

エ 直播栽培の風害対策でえん麦を混植した場合は、えん麦の**4葉期までに遅れない**ようにイネ科除草剤（ナブ乳剤）による処理を行ってください。

(3) アブラムシの防除

アブラムシ類防除は早期に発生させないことが重要で、初期防除が大切です。苗床かん注剤および直播ペレット種子内殺虫剤の残効期間は約40～45日程度です。アブラムシの飛び込みの多いようなほ場では防除を実施しましょう。

表4 アブラムシの防除例

薬剤名	種類	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
リースン顆粒水和剤	I	4A、15	3,000	14日	2回
ダントツ水溶剤	I	4A	2,000～4,000	14日	3回
アクタラ顆粒水和剤	I	4A	3,000	7日	3回
モスピラン SL 液剤	I	4A	4,000	3日	3回
トクチオン乳剤	I	1B	1,000～1,500	30日	2回

(4) 根腐病防除の実施

根腐病は6月中旬頃から発生します。特に連作、短期輪作ほ場など多発が予想されるほ場は、6月中旬と7月中旬の2回防除を実施しましょう。

表5 根腐病の防除薬剤例(株元散布)

薬剤名	種類	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
リンバー顆粒水和剤	F	7	4,000	7日	3回
モンセレン顆粒水和剤	F	20	1,000	30日	4回(育苗中含む)

<ばれいしょ>

萌芽期は平年と比べ3日ほど進んでいます。適期作業をこころがけましょう。

(1) 疫病の防除

生育は進んでいます。天候を確認しながら早めの予防防除を心がけましょう。

ばれいしょ疫病は平均気温 10℃以上（最適気温 18～20℃）の多湿条件で多発します。特に、生育が過繁茂気味のところ（風通しが悪い・山あい・防風林の影）では発生しやすく注意が必要です。ほ場をよく観察し予防防除に努めてください。

ア	初発前に必ず防除：ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。
イ	初回の防除前に感染が疑われる場合：治療効果のある薬剤を使用。
ウ	作物の生育に応じた薬剤選択：茎葉の生長段階では浸透移行性のある薬剤を使用。
エ	降雨に応じた薬剤選択：ほ場に入れられない状況が予想される場合は、Wインターバル（14日間隔）効果のある薬剤※の使用を検討してください。実施する場合は、初発前から散布してください。
※「リライアブルフロアブル 800 倍」、「プロポーズ顆粒水和剤 750 倍」、「ライメイフロアブル 2,000 倍」、「レーバスフロアブル 1,500 倍」、「ランマンフロアブル 1,000 倍」、「フロンサイド S C 1,500 倍」（平成 25 年度指導参考）。	

表6 疫病の防除(例)

防除時期	薬剤名	使用濃度	収穫前日数	使用回数
6月下旬	グリーンダイセンM水和剤	500倍	7日前	10
7月上旬	ゾーベックエンカンティア または レーバスフロアブル	2,000倍	14日前	2
		1,500倍	7日前	2

表7 疫病の防除薬剤（出典：くみあい農作物病害虫・雑草防除ガイド）

農薬名	種類	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)	浸透移 行性 の有無	効果の 発現
リライアブル フロアブル	F	43 28	800～1,000	7日	3回	○	予防 治療
ホライズン DF	F	27 11	1,000～2,500	14日	4回	○	予防 治療
ブリザード 水和剤	F	27 M5	800～1,500	7日	4回	○	予防 治療
ダイナモ 顆粒水和剤	F	21 27	2,000～3,000	7日	4回	○	予防 治療

プロポーズ 顆粒水和剤	F	40 M5	750~1,000	7日	5回	○	予防 治療	
エキナイン 顆粒水和剤	F	27 40	2,000~3,000	7日	4回	○	予防 治療	
フロンサイド SC ※2	F	29	1,000~2,000	7日	4回	×	予防	
マンゼブ剤	F	M3	400~600	7日	10回	×	予防	
銅水 和剤	ドイツボル ドーDF	F	M1	500	—	—	×	予防
	コサイド 3000	F	M1	1,000			×	予防
ランマン フロアブル	F	21	1,000~2,000	7日	4回	●	予防	
レーバス フロアブル	F	40	1,500~2,000	7日	2回	●	予防 治療	
ライメイ フロアブル	F	21	2,000~3,000	7日	4回	●	予防	
ゾーベック エンカンティア ア	F	49 11	2,000	14日	2回	○	予防 治療	

○:浸透移行性が認められる ●:浸達性のみ認められる △:浸透移行性は認められるが強くない ×:無し
※1 「フロンサイドSC」は 1,000 倍で菌核病、2,000 倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

<豆類>

は種作業は大豆、小豆、手亡は順調に終了しましたが、金時類は降雨のため中断しています。除草剤と病虫害防除の散布時期に注意してください。

(1) 除草剤の散布

散布適期を逸したり、除草剤散布後の降雨などの影響で、薬害による生育遅延が散見されます。豆類の生育や雑草の発生状況を確認し効果的な散布に心がけましょう。「パワーガイザー液剤」は有機リン系殺虫剤や他の除草剤との10日以内の近接散布は薬害の恐れがあるので避けましょう。

表7 除草剤の使用基準(例)

除草剤名	処理方法	対象作物	使用時期	10a当 使用量	使用回数 (以内)	主な対象雑草の効果						
						シロザ	タデ	ハコベ	ツユクサ	ナギナメウジ	スカタコボウ	一年生イネ科
ビンサイド 乳剤	土壌 処理	菜豆	は種後2~5日 (雑草発生前)	330~400g	1	○	◎	◎	×	◎	△	○
パワー ガイザー 液剤	土壌処理兼雑 草処理	小豆	出芽直前~出芽揃	200~300ml	1	◎	◎	◎	×	△	◎	△
		菜豆	出芽直前~出芽期			◎	◎	◎	×	△	◎	△
コダールS 水和剤	土壌 処理	菜豆	は種後出芽前 (雑草発生前)	225~300ml	1	◎	○	◎	△ ~	◎	△	◎

										x					
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--

(2)中耕

除草剤の残効を考慮し、地温の上昇と雑草減少のため中耕を実施しましょう。雑草減少のための中耕は、日中の暖かい日が効果的です。

(3)大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

クルーザーを使用している場合については、は種後1ヶ月をめどに防除を行いましょ。ほ場をよく観察して、適切な防除を実施しましょう。

表8 大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」の防除例

薬剤名	種類	RACコード	使用濃度	使用時期(収穫前)	回数(以内)
ペイオフME液剤	I	3A	2,000倍	7日	3回
ウララDF	I	29	2,000~4,000倍	7日	2回

種類・RACコードについて

農薬の耐性・抵抗性の発達を防ぐため、作用点や作用機構から各農薬の有効成分を分類したものが「RACコード」です。

種類は”F”は殺菌剤、”I”は殺虫剤を示しています。有効成分が異なっている場合でも「RACコード」が同じであれば同一系統の薬剤となるため、連用は避けましょ。